

商業都市に博物館をつくる

—ブレーメン「市立自然・民族・商業学博物館」の近代—

谷 澤 毅

目次

はしがき

1. 博物館誕生にいたるまで

(1) ゲゼルシャフト・ミュージアム（社会博物館）の収集品

(2) 市立自然史・民族学コレクションの誕生 一人類学委員会の収集品の受け入れ

(3) 北西ドイツ工業・産業博覧会の開催とその展示品

2. ブレーメン市立自然・民族・商業学博物館の創設

(1) 博物館設立構想の具体化

(2) 市立自然・民族・商業学博物館と館長シャウインスラント

結び

注

はしがき

19世紀のヨーロッパでは、「モノを集め展示する」といういとなみが広く組織的に実施されるようになり、各地で博物館が新設もしくは近代的に再編され、博覧会が開催されるようになった。急速な近代化を遂げるドイツの商業・港湾都市であるブレーメンも、このような動きとは無縁ではなかった。ハンザ都市としての伝統をはぐくんできたブレーメンは、中世末期のハンザの盛期にこそリューベックやケルン、ハンブルクといった大規模なハンザ都市と比較してそれほど目立つことのない都市であった。とはいえ、ハンブルクとともに近世・近代の大西洋貿易の拡大を背景に、都市国家、そして新生ドイツ帝国の港湾都市として商業活動や海運を通じて都市経済を拡大・発展させていった。長きにわたる商業活動とそれにより培われた各地へと広がる通商網を土台として、ブレーメンは様々なモノや情報が集積する都市となった。大規模な博物館（コレクション）が出現し、博覧会が開催されるに値する近代都市へと成長したのである¹⁾。

本稿では、19世紀末にブレーメンに設立された「市立自然・民族・商業学博物館」の設立と収集品の拡充過程の一端に光を当てながら、商業都市に設置された博物館はどのような特徴を持つか、その一例を提示してみたい。後述するように、この博物館の誕生にはその開館直前にブレーメンで開催された博覧会も関係するので、この博覧会（北西ドイツ工業・産業博覧会）にも一部言及することにする。なお、この「市立自然・民族・商業学博物館」は、ナチス期の「ドイツ植民地・海外博物館」、戦後の再度の「自然・民族・商業学博物館」の時代を経て1952年に「海外博物館」（Übersee-Museum）と改称して現在にいたっている。

さて、自然・民族・商業学博物館時代のこの博物館に関する紹介や研究は、管見の限りわが国には見当たらないようであるが、本国ドイツでは、西暦2000年にベッティナ・フォン・ブリスコーン（Bettina von Briskorn）がアフリカの民族品の収集史を中心に同館の1945年までの歴史を扱った研究書を刊行している。本稿では、このブリスコーンの研究書におもに依拠しながら旧自然・民族・商業学博物館に関する紹介を兼ねて、その設立と収集品の拡充過程に関する基本的な事柄とともに、館長フーゴー・シャウインスラントのもとで開館した同博物館の特徴についても一部述べていくことにしたい²⁾。

また、自然・民族・商業学博物館の誕生前後の時期は、皇帝ヴィルヘルム二世のもとドイツの帝国主義的な海外進出の拡大期に当たり、人々の海外植民地に対する関心が大いに高まった時期でもあった。ドイツの積極的な海外進出や植民地熱が博物館の展示や収集活動にどのような影響を与えたのか、この点も考慮しつつ、以下では、ブレーメンが商業都市であることを念頭に置きながら、この自然・民族・商業学博物館誕生の背景と博物館としての特徴をおもに収集品に注目しながら探っていくことにしたい。

1. 博物館誕生にいたるまで

ブレーメン海外博物館の前身である「市立自然・民族・商業学博物館」は、概して言えば、民族品をはじめとする以下の三つの収集品（コレクション）を母体として1896年に開館した³⁾。

1. ゲゼルシャフト・ミュージアム（社会博物館：Gesellschaft Museum）のナチュラリア（自然物）陳列室の収集品
2. 人類学委員会の収集品
3. 1890年の北西ドイツ工業・産業博覧会開催に際して収集・展示された民族品

や商品見本など

以下では、これら三つのコレクションの成り立ちや変遷、それらのおおよその内容などを確認しながら、自然・民族・商業学博物館の創設にいたる過程について概略述べていくことにしたい。

(1) ゲゼルシャフト・ミュージアム（社会博物館）の収集品

ゲゼルシャフト・ミュージアムの収集品については、起源が18世紀にまでさかのぼる。

18世紀のドイツは啓蒙の世紀を迎え、都市部を中心に市民による学問・文化・芸術にまつわるサークル活動が盛んとなった。ブレーメンでは、1770年代に読書サークル（歴史講読会：Historische Lesegesellschaft）や自然愛好家のサークル（自然協会：Physikalische Gesellschaft）などが生まれ、それらの市民団体が母体となり1783年にゲゼルシャフト・ミュージアム（社会博物館）が誕生した。

読書サークルは、おもにブレーメンの商人層を会員とした。メンバーの出資により書籍が買い集められ、徐々にライブラリーがかたちづくられていった。また、読書サークル会員の提言から生まれた自然愛好家のサークルは、ナチュラリア（自然物）や科学機材の収集を心掛け、キャビネットに収められた収集品はかなりまとまったコレクションへと成長したという。1783年には、この自然愛好家のサークル（自然協会）を核としてほかの学術・文化団体が結集し、こうして誕生した組織と各種団体のこれまでの収集物を指して人々はゲゼルシャフト・ミュージアムと呼ぶようになったらしい。とはいえ、ゲゼルシャフト・ミュージアムはまだ正式名称ではなく、当面は自然協会を名乗り、1805年になってようやく「ゲゼルシャフト・ミュージアム」が正式名称として採用されたという。

ゲゼルシャフト・ミュージアムのキャビネットに収められた収集品は、当初おもに鳥類や両生類などの標本をはじめとするナチュラリアから成り立っていた。これら収集品の多くは各地を旅行した商人が現地で入手したもので、やがてそこに自然物以外の民族の品や文物など人造の品も加わるようになった。

ヨーロッパではルネサンス期以降、異国の珍奇な品々が人々の興味をかき立て、これら異国の文物や自然物の収集品を収めたキャビネットや展示室が各地に出現するようになった（驚異の部屋：ヴンダーカムマー）。ブリスコーンによれば、ゲゼルシャフト・ミュージアムが誕生した18世紀末も、異民族のエキゾチックな文化や文物に対する関心が高まった時代であったという⁴⁾。おそらくは、「空間の世紀」である当時に実施された大航海や学術探検による成果が広く知れ渡り、それがヨー

ロッパとは全く異なる自然や民族の文化・文物に対する関心を以前にもまして多くの人々に呼び起こしたのであろう。新大陸やアジア各地、極北や南太平洋など世界各地に足を踏み入れた旅行者や商人が、自然物だけでなく衣服の断片や装飾品、家財道具、武器や偶像などの異国の品々をヨーロッパ各地へと持ち帰ったのである。

このような風潮を背景として、ゲゼルシャフト・ミュージアムでも書籍やナチュラリアに加えて民族の品が次々に収められていくことにより、おそらくその展示スペースは短期間で手狭になったのではないかと推測される。そこで博物館は、1808年にこれまで間借りしていた市内ノイシュタット（Neustadt）の建物の部屋からドムスホーフ（Domshof）に新築された建物へと移転し、コレクションの拡大に対処するための態勢を整えていった。

1815年にゲゼルシャフト・ミュージアムの収集品を見学したあるデンマーク士官（Freiherr von Eckel）の日記によると、博物館の展示室は一つの大きなホールと二つの小部屋から成り立っており、大ホールには四足動物や鳥類、鱗翅目や鞘翅目などの昆虫、アルコール漬けの各種標本といった自然界の産物が、二つの小部屋には衣服の断片や古い靴など異国の品を含む民族品や人造物が収蔵され、さらに大ホールには電気や蒸気にちなむ機器類も置かれていたという⁵⁾。コレクションの重点が自然界の産物（ナチュラリア）に置かれていたことが見て取れる。

1864年に自然科学協会（Naturwissenschaftlicher Verein）が結成されると、同協会の会合がゲゼルシャフト・ミュージアムの建物内で実施されるようになった。しかも、自然科学協会の関係者もナチュラリアをはじめとするコレクションの充実に力を入れたので、やがて活動拠点を同じくする自然科学協会とゲゼルシャフト・ミュージアム双方のコレクションは区別が難しくなった。例えば、同協会への寄贈物もゲゼルシャフト・ミュージアムの所蔵品と見なされるなど、両者の収集品は一体的なものとして見なされるようになった⁶⁾。

おそらく、コレクションのさらなる充実がその整理や保全に問題を生じさせたのであろう、1871年から、ゲゼルシャフト・ミュージアムはブレーメンの邦国政府（Senat）と所蔵品と蔵書の寄贈に関する協議を開始し、その5年後の1876年、ブレーメン邦国政府と議会（Bürgerschaft）はゲゼルシャフト・ミュージアムの所蔵品と一部蔵書の邦国への受け入れを認め、翌1877年9月からそれらの品は、「自然科学コレクション」（Naturwissenschaftliche Sammlungen）の名で一般公開されることになった。自然科学コレクションの代表（Drektor）には、ゲゼルシャフト・ミュージアムで自然物収蔵品の学芸員を務めていたオットー・フィンシュ（Otto Finsch）が就任した。後年彼はベルリンのフンボルト財団から支援を受け

て南太平洋海域の探検に赴くとともに、ニューギニア会社と契約を結んで現地に向かい、ニューギニアのドイツ植民地化計画に力を貸すことになる⁷⁾。

(2) 市立自然史・民族学コレクションの誕生 ―人類学委員会の収集品の受け入れ

1872年10月6日から14日にかけて、ブレーメンで初めての人類学展示会が文化人協会(Künstlerverein)のホールで開催された。その準備のため、同年の夏に自然科学協会と文化人協会の歴史部会(Historische Gesellschaft)の会員25名が委員会を立ち上げ、展示会終了後にこの暫定員会は人類学委員会(Anthropologische Commission)として正規の組織へと格上げされた。委員会の有力メンバーは、自然科学協会や文化人協会の歴史部会に研究を人類学の領域へと拡大するよう働きかけたほか、民族学博物館(Ethnographisches Museum)の設立も視野に入れて先史学や民族学、民俗学など人類学と関係する領域の研究の振興を訴えた⁸⁾。

さて、ブレーメン初の人類学展示会では諸民族や先史時代の品が2,500点ほど収集・展示され、そのうち約1,500点は展示会に際して作成されたカタログにも掲載された。展示に際しては、比較のために先史時代の品を含めて進化論を意識した展示方法が採用されたが、基本的に展示品は地域ごとにまとめて展示された⁹⁾。

人類学展示会開催の6年後(1878年)、この展示会の展示品を中心とする人類学委員会の諸民族・先史時代の収集品はブレーメンの邦国の所有物となり、すでに邦国の所有となっていたゲゼルシャフト・ミュージアムに由来する「自然科学コレクション」(Naturwissenschaftliche Sammlungen)と合わせて管理されることになった。これを機に、コレクションの名称は「市立自然史・民族学コレクション」(Städtische Sammlungen für Naturgeschichte und Ethnographie)へと改称され、ブレーメン市の管理のもとに置かれた。

すでに述べたように、「自然科学コレクション」の品はその前年の1877年(9月30日)から公開され、ドムスホーフに新築された建物に展示室が設けられた。大部屋一つと四つの小部屋からなる展示室は、当初は自然物(ナチュラリア)を収めた大部屋のみが公開され、その二年後(1879年10月1日)から人類学委員会の収集品を中心とした民族の品も公開の対象となり、残されていた小部屋が展示室となった。なお、コレクションの代表は南太平洋海域の探検に出発するフィンシュの後任として、1878年9月から動物学者のフベルト・ルードヴィヒ(Hubert Ludwig)が、また1881年4月からは同じく動物学者のJ.W.シュペンゲル(Spengel)が務めた。

新たに公開された民族の品々は、その多くがやはり地域ごとに分類され、30ある

キャビネットは、南太平洋海域に6、オーストラリアに1、シベリアに5、アジアの文化民族（Culturvölker）に6、アメリカに7、先史時代に3、諸民族の頭蓋骨（Racenschädel）に1、そしてアフリカに1、それぞれ割り当てられた。キャビネット以外でも、北極圏の民族の小舟、中国の家屋の模型、各地の槍、数体の木乃伊などが展示されていたという。頭蓋骨のためのキャビネットが設けられたのは、19世紀前半に普及した骨相学の影響もあったからなのかもしれない¹⁰⁾。また、後年著しく数を増していくアフリカの民族品に対しては、当時は一つのキャビネットがあてがわれているだけであった。

当初は設備がまだ不十分であったとはいえ、「市立自然史・民族学コレクション」—博物館としても扱われる—を訪れる者は多く、所蔵品も購入や寄贈などを通じて増加を見せていった¹¹⁾。1880年代に入ると、ドイツにおける植民地熱の高揚を背景として当コレクションでもアフリカや南太平洋といったドイツの進出先の産品が大量に収集されるようになった。コレクション全体を統括するシュペンゲル自身もこれら地域の産品の収集に力を入れ、その一手段として海外で活動する貿易商人に収集を依頼することもあった。例えば、シュペンゲルはエマヌエル・ポータン（Emanuel Poten）というおそらくはブレーメンの商人から1885年6月1日付で書簡を受け取っているが、それによると、西アフリカのラゴスやポルト・ノヴォで活動するポータンは、ブレーメンを出発する際にシュペンゲルの博物館（市立自然史・民族学コレクション）のために一肌脱ぐことを彼に約束したのだという¹²⁾。さらに同じ書簡で、ヒトの頭蓋骨や甲虫、蛇、植物、偶像（Fetischfiguren）、マットなどのコレクションをエル・ミナス（El Minas）、ヨルバ、ポポランド（Popoland）、ポルト・ノヴォからやがて発送できる見込みである、ダホメ王国ではシュペンゲルの博物館のために偶像をはじめ各種の品が発注済みである、とも述べられている。ここで挙げられた品々がはたして博物館の収集品に含まれるようになったか否かは、残念ながら確認できないとブリスコーンは補足している¹³⁾。

1887年6月1日、「市立自然史・民族学コレクション」の責任者にシュペンゲルの後任として動物学者フーゴー・シャウインスラント（Hugo H. Schauinsland）が就任した。当コレクションを母体としてブレーメン「市立自然・民族・商業学博物館」が1896年に開館すると彼は初代の館長に就任し、ナチスが政権を掌握する1933年までその職にとどまることになる。「世界を一つ屋根のもとに」（Die Welt unter einem Dach）という理念のもと¹⁴⁾、シャウインスラントはアフリカ民族の品をはじめとするコレクションの充実に尽力し、この博物館をドイツの有力博物館の一つへと育て上げていくのである。

(3) 北西ドイツ工業・産業博覧会の開催とその展示品

ここで取り上げるのは、「市立自然・民族・商業学博物館」誕生の母体となった三つ目の主要コレクションが形成される契機となった催しについてである。

1890年、ブレーメンでは市民公園（Bürgerpark）を会場として「北西ドイツ工業・産業博覧会」（Nordwestdeutsche Gewerbe- und Industrieausstellung）が開催された。開催期間は5月31日から10月15日までの四ヶ月半、会場面積は375,000平方メートル、来場者数は約120万人に及び、ドイツでも最大規模の博覧会となった¹⁵⁾。

博覧会開催の計画が浮上したのは1888年、すなわちブレーメンがドイツ関税同盟に加入した年である。19世紀末のブレーメンは、港湾施設の拡充などインフラの整備が進み、ほかのドイツの商業都市と同様経済的な高揚期を迎えていたが、関税同盟への加入はドイツ国民経済の拡大を通じて都市経済のさらなる発展を予測させた。しかし一方で、関税同盟加盟への期待から、ハンザ商人の末裔としてブレーメン商人がこれまで培ってきた自由貿易の理念に異論を唱える声も聞かれるようになっていた。そこで、諸外国との通商関係がブレーメンにとっていかなる意味を持つのか、この点を広く市民に紹介し、理解してもらうための催しとして商業、とりわけ商品と諸外国の民族・文化に焦点を当てた博覧会が開催されることになったのである。その推進者となったのは、ブレーメンの商業関係者をはじめ地理学、自然科学などの研究者であったが、むろん「市立自然史・民族学コレクション」の責任者であるシャウインスラントもその中の一人に含まれる。彼にとってこの博覧会は、ブレーメンの経済界とのパイプを太くする機会でもあった。実際、そのパイプは彼が後年実施する調査・収集旅行に活かされることになる。なお、ヴェルナー・ゾンバルトは当時ブレーメン商業会議所の法律顧問（Syndikus）の職にあり、彼も博覧会の実施に貢献したことが知られている¹⁶⁾。

さて、博覧会の主要展示施設の一つである商業ホール（Handelshalle）は、いわば商品学と民族学とが融合した空間となり、工業・産業博覧会の一部門である「商業・植民地博覧会」（Handels- und Kolonialausstellung）の会場として、おもに商品加工の過程と商品の原産地を紹介する様々な展示品が陳列された。商業ホール全体は中央とその両脇の、合わせて三つの部屋に仕切られていた¹⁷⁾。中央の部屋は、ブレーメンを代表する産業の一つであるタバコに関する展示会場であった。ブレーメンで加工されるタバコは、アメリカ合衆国から輸入された。ブレーメンは、ドイツ国内におけるタバコ流通だけでなく、アメリカ産タバコの輸出先としても重要な位置を占めていた¹⁸⁾。ほかにも、東西両洋の北方諸地域に関する展示品もここに配

置された。両脇の一方の部屋はアメリカを紹介する展示スペースとされ、たばこ以外にブレーメンがアメリカから輸入した重要産品である木綿、石油、さらに羊毛に関する展示品もここに集められた。おそらく最も多様性に富んでいたのは、それ以外の地域の民族品が集められたもう一つの脇の部屋であろう。ここにペルシアをはじめ、中国、日本、アジア島嶼地域、インド、オーストラリア、そしてアフリカの品々が収められ、ブレーメンの経済界がサンプル商品の提供と民族品の収集に協力した。

展示会場には現地の植物が移植され、動物のはく製や実物大の模型、人物像が配置された。展示スペースの背後には、それぞれの地域をイメージさせる油絵の背景画が置かれ、当時の技術が許す範囲内で来訪者が現地にいるようなリアルな感覚を抱くことができるよう工夫された¹⁹⁾。

ところで、この工業・産業博覧会（商業・植民地博覧会）を貫く理念を一つ取り上げるとすれば、まずそれは「自由貿易」ということになるだろう。ハンザ都市の伝統を受け継ぐブレーメンは貿易に立脚した商業都市であり、自由な取引活動に重きを置いて発展してきた。それゆえ、当初ブレーメンは商業・貿易関係者を中心にドイツ関税同盟の加盟に反対し、博覧会開催の二年前にようやく加盟が実現したのであった。

とはいえ、自由貿易の伝統はブレーメンではなおも脈打っており、例えば当時刊行されていた『博覧会新聞』（Ausstellungs-Zeitung, Nr.12, 19. August 1890）も、自由貿易の観点から博覧会について以下のように述べている。すなわち、博覧会は人々に対して諸国家間の商品交換が持つ重要性や意義についての正確な認識を呼び起こすことであろう、ブレーメンの製造業にとって対外貿易は敵であるとのごとき未開人のような認識は、我々にとって不可欠の生産物の多さに直面すれば当然撤回されることになるろう、我々が生きていくために他の民族や気候区、地域から購入しなければならないものの多さに目を見張ることになるろう、と²⁰⁾。

さらに博覧会の展示会場からは、商業・経済に関する展示部門が「商業・植民地博覧会」と呼ばれたことからわかるように、この頃ブレーメンでも感知されるようになってきた植民地熱の高まりも見取ることができる。ドイツでは植民地に対する国民の意識高揚を目的として1882年にドイツ植民地協会が立ち上げられ、その翌年にはブレーメンのタバコ商人アドルフ・リュデリッツ（Adolf Lüderitz）がアンゴラ（Angra Pequena）に上陸した。1884年にこの一帯がドイツ最初の植民地（ドイツ領西南アフリカ）となると²¹⁾、リュデリッツの地元ブレーメンでも植民地熱が一挙に高まりを見せた。とはいえ、この段階では一般市民の間の熱気は長続き

せず急速に鎮静化を見せたようである。ブレーメンの経済にとってもアフリカをはじめとする植民地が占める比重はそれほど大きなものではなく、植民地貿易はハンブルクが中継地となるが多かった。

しかし、工業・産業博覧会における植民地主義の影響は明らかであった。アフリカの展示スペースではドイツ植民地（保護領）産の商品や原材料のサンプル、民族の品をはじめ、現地でのドイツ人の活動状況もが分かりやすく展示された。展示品には、東西アフリカのドイツ植民地軍の制服をまとった下士官の人物像二体や熱帯地域におけるドイツ士官の装備品なども含まれていた。アフリカ部門に接して、ドイツのもう一方の海外進出先である南太平洋（Südsee）に関する展示部門も設けられた。ここでの展示品の多くは、かつて「自然科学コレクション」を経てブレーメン「市立自然史・民族学コレクション」の代表を務めたオットー・フィンシュにより提供されたものであった。フィンシュとブレーメンとの関係は、彼がニューギニアをはじめとする南太平洋地域のドイツ植民地化に力を入れるようになってからも続いた。『博覧会新聞』（Nr. 2, 10. Juni 1890）でも指摘されたように、工業・産業博覧会では、やはりドイツの植民地について「相応に展示される」（würdigevorführung）ことが何よりも重視されたのである²²⁾。

2. ブレーメン市立自然・民族・商業学博物館の創設

（1）博物館設立構想の具体化

北西ドイツ工業・産業博覧会は、1890年10月15日に成功裡に閉会した。博覧会のような大規模なイベントが終了すると、多くの人々の協力を仰いで各地から集められた大量の収集・展示品をどのように扱うかが問題となるが、この工業・産業博覧会では、早くから商業・植民地博覧会のコレクションを生かして商業博物館を立ち上げてはどうかとの提案が、一部の関係者から挙がっていた。展示品の提供者の多くもその案に賛成であった。ブリスコーンによれば、商業博物館の設立は当時ブームともいえる動きを見せていたとはいえ、そのほとんどは地元の産業振興を目的とした輸出商品を対象とする博物館であった。これに対してブレーメンで構想された商業博物館は、工業・産業博覧会（商業・植民地博覧会）の理念（自由貿易重視）を受け継いで輸入貿易を主眼とする博物館であったことに特徴があったという²³⁾。

工業・産業博覧会閉幕の三か月後、1891年1月23日にまずは「商業博物館設立協会」（Verein zur Errichtung eines Handelsmuseums）が立ち上げられ、博物館設立の実現に向けて協議が開始された。すぐに問題となったのは、すでにブレーメ

ンに存在していた大規模なコレクション、「市立自然史・民族学コレクション」との関係であった。じつは、同コレクションの代表を務めるシャウインスラントは、工業・産業博開催中の1890年7月に発行された「市立自然史・民族学コレクション」の『第13年次報告書』で当コレクションと工業・産業博の商業・植民地博覧会の収集・展示物との一体化を提案していた。すなわち、工業・産業博覧会のために集められた「宝物」(Schätze)は都市内で「市立コレクション」の品々と合わせて系統的に収められるべきで、それらを分散させてしまえばたいへん悔やまれることになり、もし一体化させて一つの博物館にまとめることができるのであれば、ドイツのみならず外国にもまだ存在しない博物館ができるのではないかと。シャウインスラントは、このような見通しを示していたのである²⁴⁾。

おそらくは、シャウインスラントのこのような構想も影響したのであろう、商業博物館設立協会での議論は「市立コレクション」との一体化を踏まえ、より規模の大きな博物館の建設促進へと構想が拡大し具体化していった。1891年4月の段階で、設立協会には新博物館の建設・運営資金として寄付金40万マルクが集まっていた。それを元手として、同年、商業博物館設立協会はブレーメンの邦国政府(Senat)に向けて、もし邦国に新博物館の建設費の負担ならびに工業・産業博の展示・収集品と既存の「市立コレクション」との一体化を承認してもらえるのであれば、協会は商業・植民地博の展示・収集品とこれまで集められた寄付金を邦国に寄贈する意向であるとの申し出を行った。この申し出を受けて、ブレーメン邦国議会は1891年11月18日にその内容を承認。ブレーメン中央駅前広場を新博物館建設のための予定地とし、翌1892年初頭から建設工事が開始されることになった。いま海外博物館ある場所である。

同年12月24日には、「市立自然・民族・商業学博物館のための事務局」(Behörde für das städtische Museum für Natur-, Völker- und Handelskunde)が設置され、商業会議所が選出した4名の商人会議(Kaufmannskonvent)の会員とともに、ブレーメン邦国政府関係者数名と邦国議員2名が事務局の構成員となり、学術関係者数名がその顧問となった。このような事務局員の構成から、ブリスコーンには新たな博物館と商人層が抱いていた関心との結びつきを見て取る。さらに、邦国政府に提示された新博物館構想は、地元商業関係者に向けた博物館側からの慮りもにじませていた。なぜなら、新博物館では商業を成り立たせている各種商品や産物、それらの入手や製造に関する知識が植物界と動物界、鉱物界と関連させて原産地ごとに提供されるが、これはそのこと自体が有益であることに加え、これにより博物館での観覧が人びとの商業に対する関心を喚起・増幅し活性化させることになり、

かくして我々の地元の主要産業である商業それ自体にとっても新博物館は有益となるだろうと、構想の中で考えられていたからである²⁵⁾。

初代館長となるシャウインスラントも、構想段階から商業重視の姿勢を見せていた。新博物館は、ブレーメンが世界各地と取り結んできた数えきれないほどの人的・取引関係を証明する場でなくてはならない。そうであってこそ、先の商業博覧会に協力的であったブレーメンの主導的な企業からの支援が得られていくことだろう。シャウインスラントのこのような見通しは、実際に博物館の開館後に実現されていくことになる²⁶⁾。

一方、1892年5月には工業・産業博覧会の事務局幹部によりコレクションの充実についても言及した報告書が刊行され²⁷⁾、そこには調達されることが望ましい商業関係の品のリストや自然産品（ナチュラリア）に関する助言とともに、民族品の収集に関する指針が提示され、新博物館の収集・展示の柱となる「自然」「民族」「商業」の各分野のコレクションの充実を後押しするような内容を含んでいた。このうち、民族品収集の指針では収集の対象として16項目が挙げられているが、そこには民族の経済、とりわけ商業と関係する収集分野も多く含まれていた。例えば、「食料」や「嗜好品」（サンプルを収集）、「衣服」や「装飾品」は商業の対象（商品）であるし、「船・カヌー」（模型）は重要な物流の手段である。「家財道具」や「楽器」、「遊具」、「地元産業の品々」も、製造されたものが商品として流通することがあっただろう。「狩猟・漁業の機材」、「農業・畜産の道具」は食料品の生産にかかわる。そして貨幣や度量衡にまつわる「計器」は商業活動に欠かせない。

「市立自然史・民族学コレクション」を経て新設される博物館では、ドイツの海外に向けた積極的な進出を背景として、設立後にアフリカをはじめとする民族品の収集に力が注がれていく。1893年に民族学者のハインリヒ・シュルツ（Heinrich Schurtz）が市立自然史・民族学コレクションの学術助手に採用されたことも大きな意味を持ったことと思われる。彼自身は短命であったとはいえ（1903年に40歳で没）、民族学の専門家が民族品の収集に従事する体制が整えられたからである。かくして、ブレーメンに新設される博物館では、純粋な商業部門のコレクションに加えて生活や生業と関係する民族品の収集を通じて商業部門の収集・展示が拡充されていくことになる。「商業」を名称に含む展示・収集・研究機関（自然・民族・商業学博物館）として、その名に相応しい博物館が商都ブレーメンに誕生するのである。

（2）市立自然・民族・商業学博物館と館長シャウインスラント

新博物館が「市立自然・民族・商業学博物館」(Das städtische Museum für Natur-, Völker- und Handelskunde)としてブレーメン中央駅前旧市街側広場で開館したのは、1896年1月15日のことである。これまで述べてきたように、ゲゼルシャフト・ミュージアム以来の収集品に人類学委員会の収集品が合体して形成された「市立自然史・民族学コレクション」、そこにさらに工業・産業博覧会（商業・植民地博覧会）の収集・展示品が加わり、これらが母体となって当時としてはかなり大規模な博物館がブレーメンに誕生したのである²⁸⁾。コレクションの中心をなし博物館の名称にも含まれる三領域－自然・民族・商業－のなかでは、地元経済界とのパイプを考慮してやはり当初は「商業」が重視されたのではないと思われる。開館に際して博物館の事務局長カール・バルクハウゼン（Carl Barkhausen）が、祝辞のなかで当博物館が「ブレーメンの商業の殿堂」(Ruhmeshalle des bremischen Handels)となるよう祈念しているからである²⁹⁾。

実際、博物館は開館後も地元ブレーメンの企業や経済関係者から収集・展示品の寄贈を受けることによりコレクションはさらに拡大を続けたので、展示室はすぐにスペースが不足してしまった。そこで1905年から増築工事が開始され、1911年に再度の開館を迎える。これにより、展示スペースが拡大するとともに当初一つだった採光室（アトリウム）が二つとなり、こんにちの海外博物館と同じつくりとなった³⁰⁾。

初代館長に就任したのは、先にも少し触れたフーゴー・シャウインスラント（Hugo H. Schauinsland：1857~1937）。オストプロイセンの出身で、ミュンヘン大学で教授資格を取得（1885年）した動物学者である。「市立自然史・民族学コレクション」の責任者の在任期間を含め、シャウインスラントは40年以上の長きにわたってブレーメンの博物館の代表を務めた。この間、シャウインスラントは動物学に関する知見をベースに人類学、そして民族学へと興味の対象を広げ、「市立自然・民族・商業学博物館」を自然・民族・商業にまつわるモノや情報を収集・整理して研究・展示を実施するブレーメンの中心的学術機関へと発展させていくのである。博物館開館の二日後（1896年1月17日）、シャウインスラントはブレーメン邦国政府より教授の称号を得ている。ちなみに、シャウインスラントは当時活躍した自然科学者としてやはりダーウィンの影響を受け、人類史を進化論的にとらえようとする歴史観の持ち主であった。また、民族文化に関連する諸領域のなかでは、最古の高度な文化世界の一つである古代エジプトに関心を持ち、やがてエジプトは彼の収集旅行の目的地の一つとして選ばれることになる³¹⁾。

さて、博物館内での展示に際して館長のシャウインスラントが重視したことのひとつに「本物のように見て取れること」(lebendige Anschaulichkeit)という展示理念があった。これは工業・産業博でも重視された展示理念であり、これまでのようにそれぞれの関連性をあまり考慮することなく展示品を並べるのではなく³²⁾、模造品や観覧者の錯覚なども利用しながら展示品が本来置かれていた情景を再現するようにしてディスプレイを手掛けていく方法である。それゆえ、ある雑誌で「ブレーメンのいわゆる「商業学物館」には際立った特徴がある。ここではすべてのものが生き生きとしており、本来あるべきところに存在しているかのようなのだ (als ob sie zu Hause wären)」と好意的に取り上げられたこともあった³³⁾。

「見ること」の教育的意義を重視していたシャウインスラントは、学問的な水準を保つ一方で観覧者にとってわかりやすい展示となるよう館内のディスプレイに配慮を見せた。例えば、民族の展示では対象となる民族の特徴をよく表した等身大のフィギュアが配置され、アトリウムではヤシの木が活用されて細部まで現実に忠実なパノラマが館内に出現した。模型やジオラマが活用され、棚やガラスケースには展示品がカードや説明書きとともに収められた。ほかの展示部門でも、教育効果を考慮して視覚を重視した理解しやすい展示方法が採用された。シャウインスラントが抱いていた構想によれば、博物館は学問的な探求の場であることはもちろんのことであるが、それだけでは不十分であり、一方で博物館は国民的な教養の醸成に意識的に関与し、公的な教養育成施設でなければならない、とされた³⁴⁾。

民族の品のコレクションは、各民族にまつわる商業に係る展示品とともに民族ごとにまとめられて一階で展示された。一階にはまた漁業に関する展示区画も設けられ、地下に設置されたアクアリウムへと通路が通じていた。二階は動物や鉱物・地質について、三階は人類学、植物、先史・初期歴史時代、そして商品見本のコレクションについての展示区画が設けられた。

1911年7月9日、増築工事を期にしばらく休館していた「市立自然・民族・商業学博物館」が再度開館した。開館に際しては、植民地に対する関心が再び高まりを見せていたことを背景として、海外の諸民族、とりわけドイツ国家が進出のターゲットとしていた西南アフリカに関する展示について、これまでの欠落部分を補うようにして充実が図られた。二階には新たに植民地経済に関する区画が設けられ、タバコや生ゴムなどの植民地物産をはじめ、植民地でキリスト教の布教に従事する宣教団(ミッション)の活動についてもここで扱われた。植民地経済を扱う場でも、ドイツの植民地政策に関する解説を補強するために現地民族の品が展示され、文化が紹介された³⁵⁾。

さて、館長のシャウインスラントは「見ることに」重きを置いた理念を抱いていた一方で、もう一つ、彼が理想とする博物館に備わるべき理念を重視していた。前者が博物館の展示機能にまつわる理念であるとすれば、後者は収集活動を通じたコンテンツの充実という博物館の本質にもかかわる理念であると述べてよいだろう。それが先にも紹介した「世界を一つ屋根のもとに」(Die Welt unter einem Dach)という理念であり、かねてより博物学者であればだれもが抱いていた飽くなき蒐集欲が、シャウインスラントをリーダーとして「市立自然・民族・商業学博物館」を舞台として発揮され、コレクションの充実につながったのであった。彼が思い描いていた収集にまつわるこのような理念をブリスコーンは、著作の中で「飽くなき全体への欲望」(Starker Drang zur Ganzheit)、もしくは「博物館を舞台としたコスモス」(Musealer Kosmos)、「一体的な全体性」(Das einheitliche Ganze)などと表現するが³⁶⁾、いずれも収集装置としての博物館の機能を前面に掲げることにより、ある種の博物館の理想像を提示する理念であるとともに来館者の好奇心を大いに刺激する標語にもなっているのではないかと思われる。

「世界を一つ屋根のもとに」という理念のもと、ブレーメン「市立自然・民族・商業学博物館」は、おもに寄贈と購入を通じてコレクションを拡大していった。寄贈や購入以外にも博物館関係者による収集のための旅行も実施された。館長のシャウインスラント自身も収集のために積極的に海外に赴き、大掛かりな旅行を4回実施している。一回目は1896年から97年にかけて、アメリカ合衆国・ハワイ・サモア諸島・ニュージーランド・オーストラリア南部・コロombo・エジプトなど、二回目は1905年から6年にかけて、香港・中国・朝鮮・日本・ボルネオ島・セレベス島など、三回目は1907年から8年にかけて、ボストン（合衆国：第7回国際動物学会への出席）・中国・日本など、そして第四回目に1913年から14年にかけて地中海・インド洋を経て再び中国や日本など東アジア、香港やマニラなど東南アジア、オーストラリアなどに滞在した³⁷⁾。これらの旅行に対しては、王立科学アカデミーや「商業博物館設立協会」、それに地元経済界、ドイツを代表する海運会社の一つであるブレーメンの北ドイツ・ロイド(NLD)やドイツ・アメリカ石油、貿易会社のMelchers & Co.などが資金援助を行っている。シャウインスラントはまた、第一次世界大戦後の1925年から26年にかけてエジプト方面に向けた大掛かりな旅行を実施したが、その際にもNLDがジェノヴァ・ポートサイド間の往復乗船の提供を無料で申し出るなどの配慮を見せた³⁸⁾。地元商業・経済界と博物館との結びつきは、館長シャウインスラントの調査旅行においても経済的な支援という面で活かされていったのである。

さて、これまで三つの主要なコレクションを母体とした民族と自然、商業を中心としたコレクションの形成過程を追ってきたが、このようにして蓄積されたこの博物館の豊富な展示・収集物は、そうであるがゆえに多くの人々を圧倒し、戸惑わせることになったのではないと思われる。それゆえに、博物館に対して当初は「パノプティクム」(Panoptikum: 珍奇な品々の陳列館)や「見世物小屋」(Schaubude)などといった蔑みの意味を込めた言葉が投げかけられたこともあったというが、展示内容について、ブレーメン史の著名な研究者であるシュヴァルトヴェルダーは、学術と国民的教養の間のバランスが取れていたと好意的に評価する。地元の新聞も、博物館の味方であった。1911年の再度の開館に際して『ヴェーザー新聞』(Weser-Zeitung)は、博物館の開館以来15年の歩みは正しかったと肯定的な評価を下し、またその二年後の1913年7月10日にも同紙は次のように述べる。多くの外国人が賞賛のまなざしを向けるこの博物館は、ブレーメンの人々にとっての至宝(Juwel)である、それはたまたまそうなったのでも、ましてや金銭の力によってそうなったのでもない、シャウインスラント教授のたぐいまれなる技量と巧妙なる手腕によって作り出されたのである、と³⁹⁾。博物館それ自体とともに館長シャウインスラントの功績が高く評価されているのである。

来館者の数も多く、例えば1903年の145,000人、1913年から14年にかけての243,000人などは、ヨーロッパでもトップクラスの博物館に匹敵する来館者数であったという⁴⁰⁾。展示区画をはっきりと区分させてジオラマを用いてわかりやすく、そして「一体的な全体性」のもとで自然と文化を結びつけて「一つ屋根のもとに」世界を結集させようとしたシャウインスラントの展示についてのコンセプトは、「ブレーメンモデル」として博物館の世界で知られていったのである⁴¹⁾。

結び

本稿は、商業都市に設置された博物館はどのような特徴を持つかという問題意識のもとに、ブレーメン「市立自然・民族・商業学博物館」を事例としてその成立過程と博物館としての性格の一端について探ってきた。博物館自体の名称が示すように、ブレーメンのこの博物館では「商業」が収集・展示、研究の一つの柱とされた。また、コレクションの形成や博物館の誕生に際しては地元の商人や経済界の協力がああり、館長シャウインスラントをはじめ博物館側も商業重視の姿勢を示した⁴²⁾。ことに、1890年の工業・産業博覧会の収集・展示品が新博物館のコレクションに加わったことは、この博物館の商業博物館としての性格を鮮明にするうえで極めて大

きな意味を持ったと言えるであろう。とはいえ、本稿では具体的な商人や企業の博物館とそのコレクションに対する貢献までは明らかにされておらず、コレクションの系譜と博物館の成立事情、それに博物館自体の特徴について基本的な事柄を確認したにとどまる。

また、近代ドイツに誕生した博物館に期待される役割として、やはり植民地にかかわる展示・収集が無視できない意味を持つようになったということ。これも当然のことと言えるであろうが、ブレーメンの博覧会と博物館を舞台としてその現れについても、わずかとはいえ確認することができた。

第一次世界大戦（1914～1918年）で敗北したドイツは海外の植民地を手放さざるを得ず、それは敗戦の翌1919年に締結された講和条約であるヴェルサイユ条約の締結で確定した。しかし、ブレーメン「市立自然・民族・商業学博物館」のドイツ植民地に関する展示は、1911年に再度開館した際の展示が、1935年までほぼそのまま維持され、同年、博物館はナチス体制のもと「ドイツ植民地・海外博物館」と改称される。植民地を失ったのちも、この博物館は西南アフリカをはじめとする旧植民地地域の民族品などのコレクションの保存や拡大を通じて植民地に関する記憶や思想の維持において無視できない役割を果たしていくのである⁴³⁾。

注

- 1) 19世紀前半ブレーメンの都市経済のあらましについては、以下を参照。拙稿「近代ブレーメンの都市発展 -19世紀前半の概況」、『長崎県立大学経済学部論集』第49巻第1号、2015年、33-60頁。拙稿「ハンザ都市ブレーメンの近代 -「海のドイツ」の窓口として」、川分圭子・玉木俊明編『商業と異文化の接触 -中世後期から近代におけるヨーロッパ国際商業の生成と展開』吉田書店、2017年、135-161頁。
- 2) Bettina von Briskorn, Zur Sammlungsgeschichte afrikanischer Ethnographica im Übersee-Museum Bremen 1841-1945, Übersee-Museum Bremen, 2000.
- 3) Bettina von Briskorn, a.a.O., S.39.
- 4) Ebenda, S.50-51.
- 5) Ebenda, S.51.
- 6) Ebenda, S.99, Anm. 92.
- 7) Herbert Schwarzwälder, Geschichte der freien Hansestadt Bremen, II Von der Franzosenzeit bis zum Ersten Welt Krieg (1810-1918), Bremen, S.429,432.
- 8) 19世紀後半から20世紀初頭にかけての時期は「博物館の時代」とするとともに、ある意味で民族学博物館の黄金時代でもあったとされる。ドイツ語圏では、1856年にベルリンの古代博物館に考古学・民俗学部門が設けられたほか、1873年にライプツィヒ民族学博物館が開設され、1876年にはウィーン自然史博物館に民族学部門が設けられた。竹沢尚一郎「民族学博物館の現在 -民族学博物館は21世紀に存在しうるか」『国立民族学博物館研究報告』第28巻第2号、2003年、176-177頁。
- 9) 以下のような地域区分が採用されたという。すなわち、北アフリカ、中近東（オリエント）、

- インド、中国、日本、マレー諸島、アフリカ、アメリカ(アラスカ、極北、北米、中米、南米)、ニューギニアとオーストラリア、南太平洋諸島、それに先史時代、文献と画像のコレクションが加わった。Bettina von Briskorn, a.a.O., S.53.
- 10) 骨相学Phrenologyとは、心的能力は心の器官である大脳の一領域に存在すると見なす学説で、頭蓋の形からその人の性格や心の特徴を知ることができるとする。『大辞泉』増補・新装版、1998年、978頁。
 - 11) Herbert Schwarzwälder, a.a.O., S.433.
 - 12) Bettina von Briskorn, a.a.O., S.56.
 - 13) Ebenda, S.56-57.
 - 14) ブレーメン「海外博物館」のホームページ<https://www.uebersee-museum.de/ueber-uns/das-museum/geschichte/> を参照。2021年11月27日閲覧。
 - 15) 正式名称は、「北西ドイツ工業・産業・商業・海軍・遠洋漁業・芸術博覧会 ブレーメン 1890年」(Nordwestdeutsche Gewerbe-, Industrie-, Handels-, Marine-, Hochseefischerei- und Kunst-ausstellung Bremen 1890)であった。Hugo H. Schauinsland, *Unterwegs in Übersee. Aus Reisetagebüchern und Dokumenten des früheren Direktors des Bremer Übersee-Museums. Bearbeitung, Kommentierung, begleitende Texte und Fotoauswahl von Anne E. Dünzelmann. Mit Beiträgen von Viola König und Andreas Lüderwaldt. Herausgegeben vom Übersee-Museum Bremen, Bremen, 1999, S.16.*
 - 16) Hugo H. Schauinsland, a.a.O., S.16.
 - 17) Bettina von Briskorn, a.a.O., S.58.
 - 18) 拙稿「ハンザ都市ブレーメンの近代」、148頁。
 - 19) Bettina von Briskorn, a.a.O., S.58.ブレーメンで開催された最初の商業博覧会(1865年)は学術的性格を、二回目(1874年)は商業重視の姿勢を前面に出していたのに対して、この1890年の博覧会は、後の商業博物館(おそらく市立自然・民族・商業学博物館を指す)の特徴でもある「わかりやすさ」(Anschaulichkeit)を重視した。Oliver Korn, *Hanseatische Gewerbeausstellungen im 19. Jahrhundert. Republikanische Selbstdarstellung, regionale Wirtschaftsförderung und bürgerliches Vergnügen, Opladen, 1999, S.147-148.*
 - 20) Bettina von Briskorn, a.a.O., S.58-59.
 - 21) Herbert Schwarzwälder, a.a. O., S.362-363.ドイツ植民地に関しては、さしあたり以下を参照。栗原久定『ドイツ植民地研究 ―西南アフリカ・トーゴ・カメルーン・東アフリカ・太平洋・膠州湾』合同会社パブリブ、2018年。富永智津子・永原陽子「ドイツ植民地」、西川正雄編『ドイツ史研究入門』東京大学出版会、1984年、259-271頁。
 - 22) Bettina von Briskorn, a.a.O., S.58.
 - 23) Ebenda, S.103, Anm.178.
 - 24) Jahresbericht, 1890, S.318. Bettina von Briskorn, a.a.O., S.59-60.
 - 25) Bettina von Briskorn, a.a.O., S.60.
 - 26) Hugo H. Schauinsland, a.a.O., S.20-21.
 - 27) Denkschrift betreffend die Vermehrung und Vervollständigung der Sammlungen der Handelsausstellung. Bettina von Briskorn, a.a.O., S.60, 103, Anm. 190.
 - 28) なお、ブレーメンには著名な歴史・文化博物館として、その誕生に功績のあったヨハネス・フォッケ(Johannes Focke)の名を冠したフォッケ博物館が存在する。同館は、1900年にブレーメンの邦国政府法律顧問(Senatssyndikus)であったフォッケの文化財コレクションを母体として歴史博物館の名で開館し、1918年のフォッケ誕生70年に「ブレーメン古美術フォッケ博物館」(Focke-Museum für bremische Altertümer)と改称した。1924年には、工業技

- 術協会の各種見本品をもとに1884年に誕生していた工業博物館（Gewerbe Museum）を吸収合併して現在に至る。Herbert Schwarzwälder, a.a.O., S.434,598-599.
- 29) Bettina von Briskorn, a.a.O., S.62,
- 30) Herbert Schwarzwälder, a.a.O., S.600.以下の海外博物館のホームページの年表も参照。
<https://www.uebersee-museum.de/wp-content/uploads/2020/12/Chronik-des-Uebersee-Museums-1.pdf> 2021年11月27日閲覧。
- 31) Hugo H. Schauinsland, a.a.O., S.21. Bettina von Briskorn, a.a.O., S.64.
- 32) ヨーロッパの博物館や美術館では、19世紀初頭まで系統立てた展示は行われていなかったようである。その後、体系的な展示はフランスや英国よりも、まずは美術史研究の発祥の地であったドイツで普及したという。松本佐保「近代国家と博物館・美術館 ー大英博物館とナショナル・ギャラリーのコレクションを中心に」、福井憲彦監修、伊藤真実子・松村弘一編『世界の蒐集 ーアジアをめぐる博物館・博覧会・海外旅行』山川出版社、2014年、135頁。
- 33) 雑誌 *Deutschland*, 1912のなかの記述。一方で同誌はベルリンの博物館の民族学の展示については、きわめて価値あるものが集められているが、ただ集められているだけだ、と批判的である。Bettina von Briskorn, a.a.O., S.64.
- 34) Hugo H. Schauinsland, a.a.O., S.20. ブレーメンでは啓蒙思想の普及によりかねてより市民たちによる学問への関心が高かったことを踏まえて、シャウインスラントはこのように考えたのではないかと思われる。
- 35) Bettina von Briskorn, a.a.O., S.63-64, 71, 74. 1911年の再度の開館を期に、ようやくブレーメンで製造・産出される主要商品の展示が実現し、また海運に関する新たな展示区画も加わったという。Ebenda, S.104. Anm. 208.
- 36) Ebenda, S.64.
- 37) Hugo H. Schauinsland, a.a.O., S.5-6, Inhaltsverzeichnis.
- 38) Bettina von Briskorn, a.a.O., S.80.
- 39) Hugo H. Schauinsland, a.a.O., S.22-23.
- 40) Herbert Schwarzwälder, a.a.O., S.599-600.
- 41) 海外博物館のホームページ。上記注14、30のアドレスを参照。
- 42) ブレーメンの歴史をコンパクトにまとめた以下の通史でも、館長シャウインスラントのもと地元の貿易会社との結びつきにより、市立自然・民族・商業学博物館のコレクションは重要かつ魅力的なものになったと一言述べられている。Konrad Elmshäuser, *Geschichte Bremens*, München, 2007, S.89-90.
- 43) Bettina von Briskorn, a.a.O., S.74.